

2025-2026 フィンドレー大学・福井奨学生月例報告書 3月

作成者：佐々木めい
作成日：2026年4月9日

ご挨拶

欧州遠征から戻り、フィンドレー特有の変わりやすい空模様にも、春の訪れを感じる季節となりました。皆様におかれましては、お変わりなくお過ごしでしょうか。今回のツアーでの学びについて、以下の通りご報告いたします。

ヨーロッパ遠征合唱ツアー

遠征の概要および背景

私は前期より合唱部に所属しており、本団体の恒例行事である「欧州 2 カ国における無料コンサート・ツアー」に同行しました。本遠征は、春季休暇中の 1 週間を利用して催行されたもので、ドイツ連邦共和国にて 2 回、チェコ共和国にて 1 回、計 3 回の合唱コンサートを主宰しました。参加にあたっての選考等は特設設けられておりませんが、前期からの継続的な部活動への貢献が参加の実質的な条件となっています。費用面については、学校側より多大な補助をいただいたため、個人の負担額は航空運賃（フライト代）のみに抑えられ、非常に恵まれた環境下での学術・文化交流となりました。

ドイツ：歴史の追体験と演奏活動

米国デトロイト空港を出発し、約 7 時間の空路を経てドイツのフランクフルトへと向かいました。米国時間の夕刻に出発し、現地時間の早朝に到着するという行程であったため、到着後は休息を取ることなく、班員一同で徹夜の状態でフランクフルト市街の視察を開始しました。

歴史的遺産との遭遇と考察

市内のカフェにて班員と休息を取った後、近隣に位置するフランクフルト大聖堂を視察しました。同施設は、1356 年の「金印勅令」に基づき神聖ローマ帝国皇帝を選出する重要な場所であり、実際に 10 代もの皇帝の戴冠式が執り行われた歴史的枢要を担っています。高校時代の世界史履修時に習得した知識が、眼前の実体的な遺産と初めて結びつく感覚は、単なる知識の確認を超えた、知的な感動を伴う経験となりました。また、特筆すべき点として、市街地には意識的に探求せずとも至る所に貴重な歴史的財産が点在しており、適切な事前調査なしにはその重要性を見失いかねないほどの文化的な密度の濃さを実感しました。訪問した全ての建造物が何らかの歴史的背景を有しているという感覚は、私にとって非常に新鮮な驚きでした。

ヴュルツブルク (Würzburg) での公演と世界遺産レジデンツ

フランクフルトでの視察後、最初のコンサート会場であるヴュルツブルクへと移動しました。公演では、ドイツ語、フランス語、韓国語、英語という多言語のプログラムを歌唱し、音楽を通じた国際交流を実践しました。夕食には、ホテル近隣にてザワークラウト、黒ビール、ソーセージといった伝統的なドイツ料理を堪能し、現地の食文化を五感で理解する機会を得ました。翌日には、世界遺産に指定されている「レジデンツ」を訪問しました。ナポレオンが「欧州で最も美しい館」と称え、ハプスブルク家のマリア・テレジアが「宮殿中の宮殿」と評した通り、その建築は豪華絢爛の一語に尽きるものでした。設計者バルタザール・ノイマンの傑作であり、支柱を一切排除した空間に描かれた世界最大級のフレスコ画は、第二次世界大戦時の英国軍による激しい爆撃を耐え抜き、今なお当時の姿を留めています。館内には、当時の壮麗な居室のみならず、戦争により破壊された歴史や当時の惨状を伝える写真・資料も展示されていました。規定により内部撮影は禁じられていましたが、かつての皇帝やマリア・テレジアが滞在した空間を実際に歩むことで、歴史が動いていた息遣いを肌で感じるとともに、戦争が人命のみならず「文明そのもの」を消滅させうる極めて恐ろしいものであるという事実を、深く痛感しました。



チェコ共和国：地政学的理解と平和への思索

続いて、バスにてチェコ共和国のプルゼニ (Plzeň) へと移動しました。移動中の車内では、本学 (フィンドレー大学) に在籍経験を持つチェコ人通訳者より、両国の近現代史および地政学的な関係性について詳細な講義を受けました。

戦争の負の遺産と沈黙の平原

1938年のミュンヘン協定により、ドイツ系住民が多数居住するズデーテン地方がナチス・ドイツに併合された歴史、そしてそれがチェコスロバキアの解体と第二次世界大戦の火種となった背景を学びました。その後、実際に大戦中に村一帯が焼き払われた現場を訪れましたが、そこには今なお再開発の手が及んでおらず、かつて村が存在した場所にはただ静謐な平原が広がっていました。その光景が放つ「静けさ」は、うまく言語化できないほどの重みをもって私の目に焼き付いており、戦争の凄惨さを象徴する場所として深く記憶に刻まれ

ました。

プラハにおける文化交流と伝統文化の享受

最終目的地であるプラハでは、フラデツ・クラークロヴェ (Hradec Králové) での公演を経て、丸一日の自由視察の機会を得ました。今回のツアーにおいて最も強く印象に残ったのは、このプラハでの滞在でした。チェコには日本と比較しても極めて強固な飲酒文化が根差しており、飲食店でのウェルカムドリンクとしてショットが提供されることや、全てのカフェにアルコールメニューが完備されている等、社会全体にお酒が受容されている文化形成を目の当たりにしました。特にビールの品質は際立っており、レストランが自前の醸造所を保有していることも珍しくなく、その種類の豊富さと質の高さに感銘を受けました。プラハにおいては、かつて米国フィンドレーで親交を深めたチェコ人の友人と再会を果たし、現地の案内を受けることができました。友人の推奨により、観光客には知られていない隠れミシュランの名店を訪れ、伝統的な鴨肉のローストや「クネドリーキ」と呼ばれる蒸しパン状の付け合わせ、さらには牛肉のタルタル（ユッケ状の料理）を囲みながら、深い対話の時間をもちました。日本では接することのない未知の食体験は、どれも素晴らしく、感動に値するものでした。



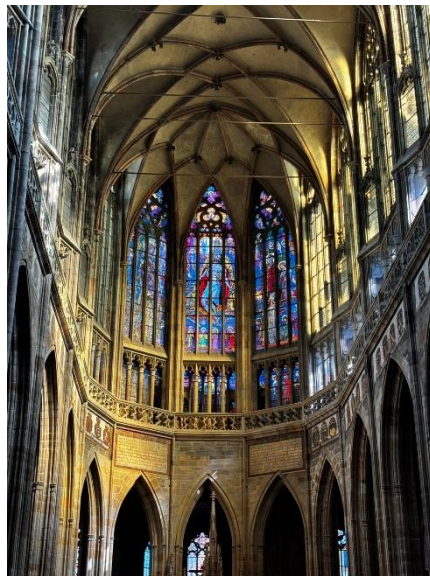
プラハ城視察における芸術的・歴史的所見

プラハ滞在の集大成として、街の象徴であるプラハ城を公式に視察しました。世界最大級のこの城郭は、単なる王宮としての役割を超え、チェコの国家としてのアイデンティティと波乱に満ちた歴史を象徴する巨大な文化財の集合体でした。

城内にそびえ立つ聖ヴィート大聖堂においては、その圧倒的なスケールとゴシック建築の精緻さに息を呑む思いがしました。特に、チェコが誇る芸術家アルフォンス・ミュシャの手によるステンドグラスから差し込む光は、神聖さと芸術性が高次元で融合しており、時を忘れて見入ってしまうほどの美しさでした。数世紀にわたり増改築を繰り返してきた城郭の重層的な構造は、ボヘミア王国の繁栄からハプスブルク家の統治、そして現代の共和国に至るまでの長い歴史の集積を如実に物語っているようでした。

また、城のテラスから俯瞰したプラハ市街の景観は、「百塔の街」と称されるに相応しいオ

レンジ色の屋根が続く統一美を保持しており、都市計画と歴史保存が高度に両立されていることがわかり、感動しました。合唱という無形の芸術表現に携わる者として、このような悠久の時を刻む有形の文化遺産に触れることは、自身の表現者としての感性を磨き、多角的な視野を養う上で極めて有意義な経験となりました。



勝利の聖母教会と「乳児イエス」像

また、マラー・ストラナ地区にある「勝利の聖母教会」へも足を運びました。ここには、世界中から巡礼者が集まる「プラハの乳児イエス (Infant Jesus of Prague)」像が安置されています。高さ 50 センチメートルに満たない小さな聖像ですが、世界各国から贈られた豪華な衣装に身を包んでおり、その慈愛に満ちた姿には不思議な力強さを感じました。多くの人々が静かに祈りを捧げる教会の空気感に触れ、チェコの人々の精神的な支柱となっている信仰の深さを実感しました。合唱という音楽活動を通じて「祈り」の心を表現することも、ある私たちにとって、この場所での体験は非常に意義深いものとなりました。



プラハ公演

本遠征の中でも特に強く心に刻まれているのが、プラハでのコンサートです。この地で肌で感じた「音楽の都」としての真髄は、私の芸術観を大きく揺さぶるものでした。

驚かされたのは、観客層の厚さとその質の高さです。特別なホールではなく、日常的な商業施設での開催であり、かつ休日でもない平日であったにもかかわらず、会場を埋め尽くすほどの聴衆が集まってくださいました。特筆すべきは、若い世代や小さなお子様連れのご家族までが足を止め、熱心に耳を傾けてくださったことです。音楽や芸術を「特別なもの」としてではなく、生活の一部として大切に育む土壌が、チェコの人々の中に文化として深く息づいていることに、言葉にできないほどの感動を覚えました。

プラハ公演では、現地の合唱団や学校の合唱部の方々と合同で演奏する機会をいただきました。総勢 150 名にも及ぶ大規模な編成となったこのステージは、まさに「overwhelming (圧倒的)」という表現が相応しいものでした。会場に響き渡る声量の凄まじさはもちろん、時には観客の数をも上回るほどの歌手が一体となって声を重ねるといふ、日本ではなかなか経験し得ない特別な空間となりました。現地の合唱団の方々と声を合わせる中で、言語の壁を越えて一つの音楽を創り上げる高揚感を感じるとともに、その圧倒的な音圧と熱量に包まれながら歌う悦びは、生涯忘れられない経験となりました。



まとめ

今回の遠征を通じて、私は「縁」を大切にすることの重要性を再確認しました。フィンドレーで出会った友人と遠く離れたチェコの地で再会し、現地の文化をより深く知ることができたのは、まさにかげがえのない縁の賜物です。また、合唱部の仲間と共に多言語の壁を越えて歌声を届けた経験や、現地で出会った方々との交流は、音楽が持つ繋がり力を強く実感させてくれました。

何より、学生という多感な時期に、自らの足で歩き、自らの目で歴史の光と影を見つめる経験ができたことに深く感謝しています。本を読んだり話を聞いたりするだけでは得られない、五感をフルに使って広げた視野は、私のこれからの人生において確固たる土台になると確信しています。このような素晴らしい機会を与えてくださった学校側、そしてツアーを

支えてくださった全ての方々に感謝し、この経験を糧にさらなる学業と部活動の発展に努めていきたいと思えます。

以上の文章につきまして、ご質問やご意見などございましたら下記メールアドレスまでご連絡ください。

sasakim@findlay.edu